小説

# 夢十夜

夏目漱石（なつめそうせき）

## 第一夜

こんな夢を見た。

腕組みをして枕元に座っていると、仰向（あおむ）きに寝た女が、静かな声でもう死にますと言う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔（うりざねがお）[1]をその中に横たえている。真っ白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。到底死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますとはっきり言った。自分も確かにこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗（のぞ）き込むようにして聞いてみた。死にますとも、と言いながら、女はぱっちりと目を開けた。大きな潤いのある目で、長いまつ毛に包まれた中は、ただ一面に真っ黒であった。その真っ黒な瞳の奥に、

5

1 瓜実顔　ウリの種に似て、色白でふっくらした長めの顔。古くから美人の典型の一つとされた。

自分の姿が鮮やかに浮かんでいる。

自分は透き通るほど深く見えるこの黒目のつやを眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろ*に枕のそばへ口を付けて、死ぬんじゃなかろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い目を眠そうに見張ったまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、しかたがないわと言った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心*に聞くと、見えるかいって、そら、そこ[1]に、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離した。腕組みをしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう言った。

「死んだら、埋めてください。大きな真珠貝[2]で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片（かけ）を墓標（はかじるし）に置いてください。そうして墓のそばに待っていてください。また会いに来ますから。」

自分は、いつ会いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。――赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、――あなた、待っていられますか。」

**1**「そこ」とは何をさすか。

**2 真珠貝**　天然の真珠や養殖真珠の母貝として用いられる貝のこと。アコヤガイ、シロチョウガイ等。

自分は黙ってうなずいた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていてください。」と思い切った声で言った。

「百年、私の墓のそばに座って待っていてください。きっと会いに来ますから。」

自分はただ待っていると答えた。すると、黒い瞳[2]のなかに鮮やかに見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の目がぱちりと閉じた。長いまつ毛の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑らかな縁の鋭い貝であった。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿った土の匂いもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそっと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾って来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちている間(ま)に、角が取れて滑らかになったんだろうと思った。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖かくなった。

自分は苔(こけ)の上に座った。これから百年の間こうして待っているんだなと考えながら、腕組みをして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の言った通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それがまた女の言った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまで

5 10 15

[2]「黒い瞳のなかに鮮やかに見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た」とは、どのようなことか。

＊ねんごろに
＊一心に

のっと落ちて行った。一つと自分は勘定した。

しばらくするとまた唐紅[3]の天道[4]がのそりと昇って来た。そうして黙って沈んでしまった。二つとまた勘定した。

自分はこういう風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分からない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行った。それでも百年がまだ来ない。しまいには、[3]苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女にだまされたのではなかろうかと思い出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなってちょうど自分の胸のあたりまで来て止まった。と思うと、すらりと揺らぐ茎の頂に、心持ち首を傾けていた細長い一輪の蕾が、ふっくらと花びらを開いた。真っ白な百合が鼻の先で骨にこたえるほど匂った。そこへ遥かの上から、ぽたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花びらに接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。

「百年はもう来ていたんだな。」とこの時初めて気がついた。

**3 唐紅**　鮮やかで濃い紅色。深紅の色。

**4 天道**　太陽。

**3**「苔の生えた丸い石」とは、どのようなことを表しているか。

## 第六夜

運慶[5]が護国寺[6]の山門[7]で仁王[8]を刻んでいるという評判だから、散歩ながら行ってみると、自分より先にもう大勢集まって、しきりに下馬評をやっていた。

山門の前五、六間[9]の所には、大きな赤松があって、その幹が斜めに山門の甍を隠して、遠い青空まで伸びている。松の緑と朱塗りの門が互いに映り合ってみごとに見える。その上松の位置がいい。門の左の端を目障りにならないように、斜に切っていって、上になるほど幅を広く屋根まで突き出しているのが何となく古風である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。そのうちでも車夫[10]が一番多い。辻待ち[11]をして退屈だから立っているに相違ない。*

「大きなもんだなあ。」と言っている。

「人間を拵えるよりもよっぽど骨が折れるだろう。」とも言っている。

そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえそうかね。わっしゃまた仁王はみんな古いのばかりかと思ってた。」と言った男がある。

**5 運慶**　?――一二二三年。鎌倉時代初期の仏師。代表作に奈良の東大寺南大門金剛力士（仁王）像（阿形像）がある。

**6 護国寺**　東京都文京区にある真言宗の寺。一六八一年創建。

**7 山門**　寺院の門。

**8 仁王**　仏法の守護神として、寺門または須弥壇前面の両側に安置した一対の金剛力士像。阿吽の相をなす。

**9 間**　長さの単位。一間は、約一・八メートル。

**10 車夫**　人力車を引く職業の男性。

**11 辻待ち**　道端で乗客を待つこと。

〈勘定〉〈下馬評〉〈目障り〉

*……に相違ない

東大寺南大門「仁王像」（阿形像）

「どうも強そうですね。なんだってえますぜ。昔から誰が強いって、仁王ほど強い人あ無いって言いますぜ。何でも日本武尊[12]よりも強いんだってえからね。」と話しかけた男もある。この男は尻[13]をはしょって、帽子をかぶらずにいた。よほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頓着なく鑿[14]と槌[15]を動かしている。*いっこう振り向きもしない。高い所に乗って、仁王の顔の辺りをしきりに彫り抜いていく。

運慶は頭に小さい烏帽子[16]のようなものを乗せて、素袍[17]だか何だかわからない大きな袖を背中で括っている。その様子がいかにも古くさい。わいわい言ってる見物人とはまるで釣り合いが取れないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思った。どうも不思議なことがあるものだと考えながら、やはり立って見ていた。

しかし運慶の方では不思議とも奇態ともとんと感じ得ない様子で一生懸命に彫ってい*

**12 日本武尊**　ヤマトタケルノミコト。『古事記』『日本書紀』に登場する古代の英雄。「倭建命」とも書く。

**13 尻をはしょって**　着物の端や裾を折って帯などに挟んで。

**14 鑿**　木材や石材の加工に用いる工具。槌で柄頭を打って使う。

**15 槌**　物を打ちたたく工具。

**16 烏帽子**　「元服した男子のかぶりもの。

**17 素袍**　室町時代に、庶民の男子が着用した裏地のない普段着。

る。仰向いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分の方を振り向いて、
「さすがは運慶だな。眼*中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王と我とあるのみという態度だ。天晴れだ。」と言って褒め出した。
自分はこの言葉を面白いと思った。それでちょっと若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、
「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。[18]大自在の妙境に達している。」と言った。
運慶は今太い眉を一寸[19]の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を縦に返すや*否や斜に、上から槌を打ち下ろした。堅い木を一刻みに削って、[4]厚い木屑が槌の声に応じて飛んだと思ったら、小鼻のおっ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がって来た。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であった。そうして少しも疑*念をさしはさんでおらんように見えた。
「よくああ無造作に鑿を使って、思うような眉や鼻ができるものだな。」と自分はあんまり感心したから独り言のように言った。するとさっきの若い男が、
「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだからけっして間違うはずはない。」と言った。
自分はこの時初めて彫刻とは[5]そんなものかと思い出した。はたして*そうなら誰にでも

**18 大自在の妙境**　芸術・技芸などが自由で思いのままになる絶妙の境地。

**19 寸**　長さの単位。一寸は、約三センチメートル。

**4** 「厚い木屑が槌の声に応じて飛んだ」とは、どのようなことか。

**5** 「そんなもの」とは、どのようなことか。

〈委細〉〈奇態〉
＊いっこう……ない
＊とんと……ない
＊眼中に……ない
＊疑念をさしはさむ
＊はたして……なら

できることだと思い出した。それで急に自分も仁王が彫ってみたくなったから見物をやめてさっそく家へ帰った。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出て見ると、せんだっての暴風で倒れた樫を、薪にするつもりで、木挽きに挽かせた手頃な奴が、たくさん積んであった。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫り始めて見たが、不幸にして、仁王は見当たらなかった。その次のにも運悪く掘り当てることができなかった。三番目のにも仁王はいなかった。自分は積んである薪を片っ端から彫って見たが、どれもこれも仁王を蔵しているのはなかった。ついに明治の木にはとうてい仁王は埋まっていないものだと悟った。それで運慶が今日まで生きている理由もほぼ分かった。

**20 木挽き**　樹木をのこぎりで引いて、用材に仕立てることを職業とする人。

**夏目漱石**　一八六七（慶応三）―一九一六（大正五）年。小説家・英文学者。東京都に生まれた。『吾輩は猫である』で文壇に登場し、『坊っちゃん』『草枕』などで名声を確立した。自然主義文学に抗し、鋭い文明批判の精神によって独自の文学を打ち立てた。この作品は一九〇八年に発表されたもので、本文は「漱石全集」第八巻によった。